岡山大学大学院文化科学研究科紀要第18号（2004.11）

ハルトマン・フォン・アウエの『哀れなハインリヒ』と『グレゴーリウス』における非人称表現

名倉周平

I．序

本稿で取り扱う『哀れなハインリヒ』及び『グレゴーリウス』[1]という作品は、ともに中高ドイツ語期に宮廷叙事詩人として活躍したハルトマン・フォン・アウエ（1170-1205）によって書かれた作品である。ハルトマンの２つの長編作品である『エーレク』と『イーヴェイン』とを合わせると、これら作品が書かれた順序は、(1)『エーレク』(2)『グレゴーリウス』(3)『哀れなハインリヒ』(4)『イーヴェイン』の順であり、『グレゴーリウス』がハインリヒ４世十字軍（1197-1198）の前[2]、そして『哀れなハインリヒ』がその後に書かれたというのが定説となっている。ただいずれにしても『哀れなハインリヒ』と『グレゴーリウス』はともに1200年前後の作品であり、中高ドイツ語期の英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』とほぼ成立年代が一致する。『哀れなハインリヒ』及び『グレゴーリウス』と『ニーベルンゲンの歌』は成立した地方が異なるとは言え、ほぼ成立した年代が一致するということは、作品に用いられている非人称表現にも共通の特徴が数多く見出されるのではないかと考えられる。さらにハルトマン・フォン・アウエの描写として次のようなものがある。

「よく読書し、教養がある騎士」という言葉どおり、ライヒェナウの修道院学校で学んだと推測されるその読書能力とラテン語知識は有名である[3]。

当時、騎士階級は読み書きが出来ないのが一般的であり、その必要性もなかった。であるからこの当時描かれた作品の中には、作者自身が読み書きが出来ないために、口述により作品を完成させた場合もあったと容易に推測される。このような場合には筆記者によっては、書き誤ることもあった可能性は十分にあり得たであろう。それに対して上で記したような能力をハルトマン自身が有していたということは、彼の作品は彼自身の手によって描かれた可能性が極めて高く、口述によって完成された作品のように媒介者を通さずに直接的に描かれたのであるから、たとえ彼自身の癖があったにせよ、作品を文法的な観点から見ていくにも最適なものであると思われる。

以下において『哀れなハインリヒ』及び『グレゴーリウス』から具体的に非人称表現を含んだ文例を挙げ、必要と思われる最低限の文法的な解説を加えるとともに、意味的・用法的な違いにおいて分類し、非人称表現のあり方を検証していくことが本稿の目的である。なお文例には『哀れなハインリヒ』(Der arme Heinrich)の(H)を、『グレゴーリウス』(Gregorius)の(G)を付すことによって、いずれの作品から取り出された文例であるかということを示すことにする。

Ⅱ．自然現象に関する非人称表現

先ずは『哀れなハインリヒ』と『グレゴーリウス』の両作品に見られる自然現象に関する非人称表現に関して考察していくことにする。それほど数多く見られるわけではないが、以下のものがその文例である。最初は『哀れなハインリヒ』に見られる自然現象の中でも時間(昼夜)を表わす非人称表現の文例である。

(文例１) dô ez vil kûme was getaget「どうにか辛うじて夜が明けたときに」(H.904)

『哀れなハインリヒ』の中に見られる文例はわずかにこの１文例のみである。ezは非人称主語。wasは完了の助動詞sînの過去３人称単数形、getagetはtagen「(ez tagetの形で) 夜が明ける」の過去分詞で、was getagetで過去完了。過去完了のwas getagetのwasは、通常hatteとなるところが現代ドイツ語とは異なる点であるが、非人称表現には違いない。現代ドイツ語にもtagenという語はあり、必ずes tagt…の使い方となる。他方『グレゴーリウス』ではどのようになっているであろうか。

(文例２)Morgen dô ez begunde tagen「翌日夜が明けたときに」(G.2080)

『哀れなハインリヒ』と同様、tagenを用いた非人称表現である。文例２を文法的に見ていくとezは非人称主語、begundeはbeginnenの過去３人称単数形、tagenは不定詞である。なおこのbegundeは「～始めた」の意味を特にない。用法としては文例１とまったく変わるところはない。

ところでこの動詞tagenをもう少し詳しく見ていくと、現代ドイツ語のtagenには「①(es tagtの形で) 朝になる、②会議を開く、審議する、酒盛りをする」の２つ意味があるが、他方で中高ドイツ語においては「①輝く、② (ez tagetの形で) 夜が明ける、③現れる、④ (出頭の) 期日を決める、⑤延期する、一時中止する」と意味は多彩である。もちろん非人称表現は「夜が明ける」の意味だけに限られ、それ以外は人称表現であり、もちろん非人称主語ezは伴わない。このことから二つの推論が成り立つ。先ずはこのezは自然現象を表わす際に用いられるezである。もう一つはtagenには多くの人称表現があるために、ez tagetの形を取ることにより、明らかに「夜が明ける」の意味を知らせることが出来るというものである。いずれにしてもezは非人称主語ではあるが、前者は自然現象の主語として通常付けられるez、後者はtagenを他の人称表現と区別するためにezと結合することにより一種の非人称の熟語を形成したという見方である。

(文例３)nû was ez harte spâte「今や夜は大変更けていた」(G.2812)

ezは非人称主語。harte(hart)「ひどく、大変に」は副詞、spâte(spât)「遅く、夕方、夜に」も副詞。このezは純粋に時を表わす際に用いられる非人称主語であると考えられる。意味においては異なるが、同様の表現が文例４である。

(文例４)dô was ez nâhen bî dem tage「そのとき時間は夜明け近くであった」(G.3051)

男性名詞tac「昼間」を用いた非人称表現である。ezは非人称主語、このezは現代ドイツ語のEs ist schon Nacht.「もう夜だ」の文例に見られるのと同じく時間を表わすezであると考えられる[(4)]。

(文例５)ez ist hiute der dritte tac「今日で三日目である」(H.981)

文例4は同じく時間を表わす非人称表現であるが、昼夜を表わすものではなく、日時を表わす表現である。ezは非人称主語、istはsînの現在3人称単数形、der dritte tac「三日目」は補語である。現代ドイツ語であれば、hiute「今日」が文頭に立てば、このezは省略されるものである。

（文例6）ez ist hiute der dritte tac「今日で三日目である」（G.2963）

文例6は『グレゴーリウス』からのものであるが、『哀れなハインリヒ』からの文例5と完全に同一のものである。

この表現は現代ドイツ語における時間を表わす非人称表現とまったく変るところはない。

次は寒暖を表わす非人称表現の文例である。

（文例7）da enist ze heiz noch ze kalt「そこでは暑すぎも寒すぎもしない」（H.783）

enistのenは否定辞、istはsînの現在3人称単数形。この文には非人称主語ezが見当たらない。この文例の場合、場所を表わす副詞であるda「そこでは」が文頭を占めているので、ezは省かれてしまったのである。

以上が自然現象を表わす非人称表現であるが、『哀れなハインリヒ』にも『グレゴーリウス』にも残念ながら現代ドイツ語では必ず非人称主語esを付けなければならない天気を表わす非人称表現は見られなかった。

Ⅲ．非人称受動文

以下に挙げたものが非人称受動文の文例であるが、どのような形を取っているであろうか。

（文例8）an dem enwas vergezzen nie deheiner der tugent, die ein ritter in sîner jugent ze vollem lobe haben sol「騎士が若いときに十分に称賛されるために持つべきいかなる美点もこの人においては決して忘れられていなかった」（H.32-35）

この文例はan jm＋et（属）＋vergezzen「その人に関して～のことを忘れる」の意味の表現が受動構文として用いられた文である。もともと対格がないために非人称受動文となっている。anは前置詞、demは指示代名詞の男性与格でこの文例の前に書かれているein herre「領主、支配者」を指している[5]。enwasは否定辞enと受動の助動詞sînの過去3人称単数形の融合形、vergezzenはvergezzenの過去分詞。deheiner der tugentはdehein diu tugent「いかなる美点も」の属格。この文の文頭はan demが占めているために、現代ドイツ語の用法と同じく非人称主語ezは見られない。

（文例9）besunder wart gegangen「一人一人次々と退出された（＝全員が退出した）」（G.516）

この文例はgân（gên）「行く」を用いた非人称受動文である。besunder「一人一人、すべての人々が次々と」は副詞、wartは受動の助動詞werdenの過去3人称単数形、gegangenはgân（gên）の過去分詞。この文も副詞besunderが文頭を占めているので、やはり非人称主語ezは見られない。

（文例10）nû enbirt er und ich enbir der êren, der uns was gedâht「今や、私たちに与えられることになっていた名誉を彼は持たず、そして私も持たない」（H.1300-1301）

この文例はgedenken「jmにet（属）を与えようと考える」を用いた非人称受動文である。derは関係

代名詞の女性属格で、直前のder êren「名誉」が先行詞。unsは人称代名詞wir「私たちは」の与格。wasは受動の助動詞sînの過去３人称単数形で、gedâhtはgedenkenの過去分詞。この非人称受動文は副文中にあるので、もちろん非人称主語ezは見られない。

以上が非人称受動文の文例であるが、これらの文例は現代ドイツ語の非人称受動文と大きな差はないものである。

Ⅳ．非人称動詞―ezの見られないタイプ―

１）感情を表わす非人称表現

以下に挙げる文例は非人称動詞を用いた非人称表現であるが、非人称主語ezの見られないタイプのものである。

最初はdunken「jnにはet(属)が～のように思われる」（～には様態を表す副詞や副文が入る）を用いた文例である。

(文例11) des dûhte sînen herren genuoc「そのことが彼の主人には十分であると思われた」(H.277)

desは指示代名詞dazの属格、dûhteはdunkenの過去３人称単数形、herrenは男性名詞hêrre(herre)「支配者、領主」の対格、genuoc「十分に」が様態を表わす副詞。この文はdunkenのもっとも基本的な非人称表現の構造を取っている。

(文例12) mich endunke, daz der eine tac genuoc tiure si gegeben umbe daz êwige leben「永遠の生のために、その一日が十分高価に与えられていると私には思われるほどに」(H.1146)

endunkeは贅語en＋dunkenの接続法現在。物の属格の代わりにdaz副文が入った構文である。

(文例13) dô dûhte si sich unsælic gnuoc「そのとき彼女自身には大変不幸であると思われた」(G.2485)

dûhteはdunkenの過去３人称単数形であり、その直後のsiはこの人称代名詞の形から見れば、３人称女性単数形の主格か対格、もしくは複数形の主格か対格となるが、文の意味的な前後関係から複数形ではなく単数形であると同時に人を指していると考えられる。それでは主格であるのか、それとも対格であるのか。もしこのsiが主格であるならば、この文は非人称表現ではないということになるが、動詞dunkenは物を主格と人の対格を取るという性質上から、このsiは対格と考えられ、その直後の再帰代名詞の対格のsichとともに用いられて、「彼女自身には～と思われた」という意味になっていると考えられる。よってこの文も非人称表現である。

(文例14) den duhte, daz niender anderswâ daz vischen wæger wære「その人（＝漁師）にはほかの場所では漁がこれ以上有利であることは決してないように思われた」(G.2778-2779)

この文例のdenが人を表わす対格の役割を果たしており、これは前文にあるein vischære「漁師」を指す指示代名詞の男性対格[6]。物の属格の代わりにdaz副文が入った構文である。これは上述の文例12とまったく同じ構造を取っている非人称表現である。

以上がdunkenに関する文例であるが、いずれの文例にも非人称主語ezは見られない。なおdunkenには物事の主格と人の対格と形容詞、副詞もしくは副文を取って「et(主)がjnには～であると思われ

る」という人称表現もある。

次はverdriezen「jnにはet(属)が気に入らない、不愉快である」を用いた文例である。このverdriezenを用いた文例は比較的数が多い。

(文例15) wan in vil lützel des verdrôz「というのも彼にはそれが少しも不愉快ではなかったからである」(H.288)

inは人称代名詞erの対格、desは指示代名詞dazの属格、verdrôzはverdriezenの過去3人称単数形。

(文例16) Dô dise wünne und den gemach der werlde vînt ersach, ir beider êren in verdroz「人類の敵（＝悪魔）がこの喜びと安楽を目にしたとき、彼（＝悪魔）には彼ら両人の名声が不愉快であった」(G.303-304,307)

ir beider êrenは所有代名詞＋数詞＋女性名詞ir beider êre「彼ら両人の名誉」の属格、inは人称代名詞erの対格、verdrôzはverdriezenの過去3人称単数形。

(文例17) dô des hôchmuotes den hôhen portenære verdrôz「この気高き門番にはこの傲慢が不愉快であったとき」(H.405)

hochmuotesは男性名詞hochmuot「傲慢」の属格、portenæreは男性名詞portenære「門番」の対格、verdrôzはverdriezenの過去3人称単数形。

(文例18) Daz wintgedoeze wart sô grôz, daz si ôf dem sô verdrôz「風のとどろきが非常に激しくなってきたので、海上で彼らは不愉快になった」(G.965-966)

siは人称代名詞si(sî, sie)の対格、verdrôzはverdriezenの過去3人称単数形。この文は物の属格を伴わないタイプのものである。

(文例19) unlanc was, daz sî es verdrôz「彼らにはそのことが不愉快になるまで長くはかからなかった」(G.2164)

sîは人称代名詞sî(si, sie)の対格、esは人称代名詞ezの属格、verdrôzはverdriezenの過去3人称単数形。

(文例20) daz niemen vrumen des verdrôz「どんな優れた者にもそのことが不愉快であることはなかった」(G.2172)

niemenは不定代名詞nieman(niemen)「誰も～ない」の対格、vrumenは形容詞vrum(vrom)「優れた、立派な、有能な」の対格、desは指示代名詞dazの属格、verdrôzはverdriezenの過去3人称単数形。

(文例21) des enwolde in niht verdriezen「彼にはそのことが不快には思われなかった」(G.3266)

enwoldeは否定辞en＋wellenの過去3人称単数形。verdriezenが不定詞の形で用いられた文例。

以上がverdriezenについての文例であるが、verdriezenには人称表現はなく、非人称表現の用法しかない動詞である。なお上述のすべての文例において、非人称主語ezは見られない。

次はwundern「jnはet(属)を不思議に思う、知りたがる」を用いた文例である。

(文例22) herre, des wundert mich「ご主人様、それが私には不思議なのです」(H.377)

desは指示代名詞dazの属格、wundertはwundernの現在３人称単数形。このwundernもverdriezenと同様に、非人称表現の用法しかない動詞である。やはり非人称主語ezは見られない。

以上が感情を表わす非人称表現である。

２）充足・不足・欠如を表わす非人称表現

先ずはüber werden「jmには有り余る」及びgebresten「jmからet(属)またはan et(与)が欠けている」を用いた文例である。

(文例23) im enwart über noch gebrast「彼には有り余っていることもなく、また欠けていることもなかった」(H.67)

文例23は１文中に非人称表現が２つ見られる例である。enwart überとgebrastとが相関している。enwart überのenは否定辞でwart überはüber werdenの過去３人称単数形、gebrastはgebrestenの過去３人称単数形。非人称主語ezはいずれにも見られない。

次はgebrestenのみを用いた文例である。

(文例24) als ein vrumer ritter sol, dem schoener zühte niht gebrast「美しい作法が欠けていない優れた騎士が当然なすべきように」(H.1340-1341)

demは関係代名詞derの与格で、先行詞はein vrumer ritter「優れた騎士」。このdemがgebrestenが取る人の与格。zühteは女性名詞zuht「礼儀正しさ、作法、しつけ」の単数属格。gebrastはgebrestenの過去３人称単数形。非人称主語ezは見られない。

(文例25) daz im dar under nie gebrast「彼にはその際、欠けることはなかった」(G.1893)

dar underは現代ドイツ語のdarunter、gebrastはgebrestenの過去３人称単数形。非人称主語ezは見られない。

(文例26) nû behagete im diu vrouwe wol, an der nihtes gebrast「何事にも欠けることのなかったその女性は今や彼の気に入っていた」(G.1955,1957)

derは関係代名詞の女性与格で、先行詞はdiu vrouwe「女性」。nihtesは中性名詞niht「無」の属格、gebrastはgebrestenの過去３人称単数形。非人称主語ezは見られない。この文例はan＋人の与格と物の属格から成る文で、上述のgebrestenの用法とは少し異なるが、gebrestenの主語がないことから、非人称表現であることには変わりない。

(文例27) dem des guotes gebrast「その人（＝客人）には財産が欠けていた」(G.3272)

demは関係代名詞の男性与格で、先行詞は前文のden gazt「客人」[7]。guotesは中性名詞guot「財産」の属格、gebrastはgebrestenの過去３人称単数形。非人称主語ezはこの文例においても見られない。

上述の文例はすべてgebrestenの非人称表現であるが、このgebrestenには人称表現もある。しかしながら前述のdunkenの場合と同様に、非人称表現においても人称表現においても意味はまったく変わりはなく、また非人称表現で用いられる方が圧倒的に多い。

以上がüber werden及びgebrestenに関しての文例である。

3）成功・失敗を表わす非人称表現

gelingen「jmは成功する」とmissegân(missegên)「jmにはうまく行かない、失敗する」を用いた文例である。この文例に関しては『哀れのハインリヒ』には1文例もなく、『グレゴーリウス』からの文例であるが、gelingenとmissegân(missegên)を1文中に同時に含んだものがあった。その文例は以下のものである。

(文例28) dô muose in wol gelingen, wan im niemer missegât, der sich ze rehte an in verlât

「そのとき彼らはうまく成功するに違いなかった。なぜなら本当に彼（＝神）に身を任せている彼には決してうまくいかないことなどないからである」(G.696-698)

inは人称代名詞si(sî,sie)の与格、missggâtはmissegân(missegên)の現在3人称単数形。この文例ではgelingen及びmissegân(missegên)ともにかっちりと与格を取っており、用法としては典型的な形である。なお非人称主語ezは見られない。

以下の文例はgelingenを単独で用いた文例である。

(文例29) ouch was dem selben dar an sô schone, gelungen daz…「その男にはその事ゆえに以下のように立派に成功した」(G.2004-2006)

wasは完了の助動詞sînの過去3人称単数形、dem selbenはder selbe「その（同じ）男、彼」の与格、dar anは現代ドイツ語のdaranに相当し、ここでは前文の内容を指している。sôとschône「立派に」はともに副詞、gelungenはgelingenの過去分詞。非人称主語ezは見られない。

(文例30) die daz wolden schouwen, wederm dâ gelunge「彼ら（＝騎士も婦人も）はどちらにそこでうまく行くかを見物することを欲した」(G.2114-2115)

dazは指示代名詞でwedermの副文と相関しており、wedermはweder「二つ(二人)のうちのいずれか」の単数与格、gelungeはgelingenの接続法過去。非人称主語ezは見られない。

以上がgelingenとmissegân(missegên)に関しての文例である。

ここまで非人称主語ezがまったく見られない非人称動詞を取り扱ってきたが、次項は反対に非人称主語ezが見られる非人称動詞を考察していくことにする。

V．非人称動詞—ezの見られるタイプ—

この項では非人称主語ezが見られるタイプの非人称動詞について取り扱うが、場合によっては同一の動詞を用いている際に、ある文例にはezが見られ、ある文例にはezが見られない場合もこの項で検討することにする。

1）適当を表わす非人称表現

gezemen「jnにet(属)が適切である、ふさわしいと思う」を用いた文例である。

(文例31) got gebe daz es iuch gezeme「神様があなたたちにそれが相応しくあるように与えてくださいますように」(H.1500)

gezemeはgezemenの接続法現在。これは上述の意味や用法に合致する。なお非人称主語ezは見られ

ない。

(文例32) ein solhe bivilde er nam, sô ez landes herren wol gezam「国の領主に相応しいように弔いの儀式が執り行われた」(G.271-272)

(文例33) diu half in âne untriuwe steln, ir vrouwen kumber verheln, sô ez wîbes güete gezam「その女性は彼らを密かに行くよう、また彼女の女主人の苦しみを隠すために女の好意に相応しかったように手助けした」(G.665-669)

文例31対して文例32、33には非人称主語らしきezが見られる。先ずは文例32を見てみると、gezamはgezemenの過去3人称単数形、landesは中性名詞lant「国、領国」の単数属格でherrenにかかっており、herrenは男性名詞hêrre(herre)「支配者、領主」の単数与格と考えられる。この理由は、この文には人の対格を伴っていないため、上述の「jnにet(属)が適切である、ふさわしいと思う」の用法ではなく、別の意味「jmもしくはet(与)に適切である、ふさわしい」に当たると考えたからである。「jmもしくはet(与)に適切である、ふさわしい」は一般には人称表現で用いる用法であるが、もしこのezが単に前出の中性名詞を指しているならば、これは意味のある主語ということになり、文例32は人称表現ということになる。しかしながらezが具体的に指し示す語、もしくは表現があるかというと残念ながら見当たらない。また後ろにze不定詞句やdaz副文なども見られない。具体的に指し示すものがないので、これは非人称主語のezと判断できるのではなかろうか。

それでは文例33はどうであろうか。wibesは中性名詞wip「女性」の単数属格で女性名詞güete「高貴さ、好意、慈悲」にかかっており、güeteは単数与格と考えられる。このgüeteを与格と見なすのも、文例32の場合と同じ理由による。それではこの部分に見られるezはどのように説明をするべきであろうか。この文例33においてもやはりezが具体的に示す前述、あるいは後述の表現は見当たらない。ということはこのezも非人称主語と見なすのが妥当といえるのではなかろうか。

非人称主語ezの見られない文例31とezの見られる文例32、33の大きな相違は次のような点にある。つまり文例31の場合は「jnにet(属)が適切である、ふさわしいと思う」という用法であり、この用法は基本的に非人称表現であるのに対し、文例32、33の場合は「jmもしくはet(与)に適切である、ふさわしい」という用法であり、この用法は基本的には人称表現で用いられるものの、ここにおいては非人称表現として用いられているということである。この違いがezの有無の違いに現れてきた可能性も十分考えられるのである。つまり文例32,33は明らかに非人称表現であることを明示するために、非人称主語ezを付けたとも考えられるのである。

2）状況・状態を表わす非人称表現

先ずはgeschehen「①（様態の副詞、または形容詞を伴って）jmにとって・・・の状態になる、②jmに・・・が生じる、起こる」を用いた文例である。geschehenを用いた非人称表現は『哀れなハインリヒ』においても『グレゴーリウス』においても非常に数が多いのが特徴である。

(文例34) sô geschiht iu beiden wol「そうすればあなた方両人にとって良い状態になります」(G.263)

geschihtはgeschehenの現在３人称単数形、iu beidenは人称代名詞＋数詞ir beide「あなたたち二人は」の与格、wol「良く、十分に」は副詞。

（文例35）swâ iemanne guot geschiht「誰かにとって良い状態になるときはいつも」（G.311）

iemanneは不定代名詞ieman（iemen）「誰かある人が」の与格、guot「良い」は形容詞。

（文例36）und wænet mir sî wol geschehen「そして（あなたたちは）私にとって良い状態になったと思うだろう」（H.763）

sîは完了の助動詞sînの接続法現在、wol「良く、十分に」は副詞、geschehenはgeschehenの過去分詞。

（文例37）ich sage dir, wie dir geschiht「私はそなたに、そなたにとってどのような状態となるかを述べる」（H.1084）

（文例38）ez engeschach ni kinde alsô wê, als dir muoz von mir geschehen「私によってそなたに起こるであろうように、子供にとってそのように痛い状態になったことは一度もなかった」（H.1096-1097）

engeschachは否定辞enとgeschehenの過去３人称単数形との融合形、muozは過去現在動詞müezenの現在３人称単数形。

（文例39）daz ir ze sterbenne niht geschach「彼女にとって死ぬべき状態とならかったことを」（H.1282）

irは人称代名詞si（siu, sî, sie）の与格、ze sterbenneは前置詞ze＋sterben「死ぬ」の動名詞の与格、geschachはgeschehenの過去３人称単数形。

（文例40）im enwære ze weinenne geschehen「彼にとって泣くべき状態にならなかった」（H.1288）

enwæreは否定辞enと完了の助動詞sînの接続法過去の融合形、ze weinenneは前置詞ze＋weinen「泣く」の動名詞の与格、geschehenはgeschehenの過去分詞。

（文例41）ez enwart nie vreude merre dan in beiden was geschehen「彼ら二人に生じたよりも喜びの大きなものが生じたのはこれまで一度もなかった」（H.1406-1407）

in beidenは人称代名詞＋数詞sie beideの与格。

（文例42）nû was im dar an wol geschehen「今彼にはそのことに関して良い状態となった」（G.1884）

（文例43）im was sô liebe daran geschehen daz er sich dûhte vreudrîch「彼にとって非常にそのことに関して喜ばしくなっていたので、その結果彼は楽しく思った」（G.1970-1971）

liebe「喜ばしく」は副詞。

（文例44）Als in Grêgôrjus komen sach, vil sinneclîchen im geschach「グレゴーリウスが彼が来るのを見たとき、彼にとって非常に分別ある状態になった」（G.2103-2104）[8]

sinneclîchen「思慮深く、賢く」は副詞。

（文例45）im enist ze weinen niht geschehen「彼にとって泣くべき状態にはならなかった」（G.2343）

（文例46）swâ dem ze weinenne geschiht「その人にとって泣くべき状態となるときはいつでも」（G.2401）

demは指示代名詞の男性与格で、前行のmanを指す[9]。

(文例47) daz got mich bræhte ûf die stat, daz mir sô wol geschæhe「神が私を、私にとって非常に良い状態の場所へと運んで行ってくれるよう」(G.2611)

geschæheはgeschehenの接続法過去。

(文例48) mir ist harte wol geschehen, sît ich hie solde gesehen alsô guote liute「私がここにおいてこのようにすばらしい人々を見ることになったので、私にはおおいにすばらしくあった」(G.3277-3279)

harte「大変に、非常に」とwol「良く、十分に」はともに副詞。

以上がgeschehenが用いられた文例であるが、いずれの文例もgeschehenの非人称の用法に合致する構文である。しかしながら文例38及び41について見てみると文頭をezが占めていることが分かる。果たしてこのezは非人称主語と言うことができるであろうか。

先ずは文例38である。文法的な解説は文例の下に記したとおりであるが、この文は1文中にgeschehenが2つ用いられた文である。ただ意味や用法から見てみると、geschehenが絶対に対格を伴わないのでこのezは当然主語と見なすべきである。これがgeschehenの主語であるならば、この文が非人称表現である以上、このezは非人称主語と見なすべきであろう。

一方、文例41はどうであろうか。この文のgeschehenを含む箇所を検討してみると、比較級とともに用いられる接続詞dan (danne, denne, den) の後ろにあり、in beiden was geschehenのみで文を構成していることが理解される。つまりdanを境にez enwart nie vreude merreとin beiden was geschehenとに分けられるため、このezはenwartの主語ということになる。それではez enwart nie vreude merreが非人称構文であろうかと言えば、そうではない。なぜなら主語として女性名詞vreude (vröude, vröide)「幸福、喜び」があるからである。このことからこのezは、本来の主語があるにも拘らず、その主語を後回しにし、まったく意味のないezを文頭においた穴埋めのezであることが理解される。さらにこの文例43を詳しく見ていくと、文頭に穴埋めのez、否定辞enを伴った動詞werdenの過去形、否定の副詞nie、形容詞vilの比較級merre (mêrの別形) から成り立っていることが分かる。この構成は私が以前書いた『ニーベルンゲンの歌の非人称表現』の非人称受動文の項目において、否定語＋比較級＋werdenが組み合わされたときの特徴として穴埋めのezが現れていることを言及したが、この文例41に関してみれば非人称受動文ではないのであるが、この否定語＋比較級＋werdenの組み合わせに合致するのである[10]。

次にergân (ergên)「jmにとって結果として～になる」を用いた文例である。ergân (ergên) はgeschehenと並んで『哀れなハインリヒ』にも『グレゴーリウス』にも非常に多く見られる非人称動詞である。

(文例49) wie ez im ergê「彼にとって結果としてどうなるのか」(G.820)

ergêはergân (ergên) の接続法現在。

（文例50）wie ez ergie dirre vrouwen kinde「この女性の子供にとって結果としてどうなったのか」（G.924-925）

ergieはergêはergân（ergên）の過去３人称単数形。

（文例51）wan als ez doch ergienge「それでもやはり状況が進行していく以外に」（H.948）

ergiengeはergân（ergên）の接続法過去。

（文例52）wie sol ez mir nû ergân「私にとって結果としてこれからどのようになるのであろうか」（H,1291）

（文例53）wiez dar nâch ergienge「そのあと結果としてどのようになったのか」（H.1428）

wiezはwie＋ezの融合形、ergiengeはergân（ergên）の接続法過去。

（文例54）daz ez in alsam müese ergân「彼らにとっては結果としてまったく同じようになるに違いなかった」（G.2191）

以上がergân（ergên）に関する文例であるが、gezemenやgeschehenに見られたように、場合によっては非人称主語ezが付くと言ったものではなく、上述の文例すべてに非人称主語ezが付いているのが最大の特徴である。これは『ニーベルンゲンの歌』の特徴とまったく同様であり、このことからergân（ergên）は中高ドイツ語期からすでに非人称主語を必ず付ける用法が確立されていたと言うことができる。

次にgân（gên）「～の状態である」を用いた文例である。

（文例55）wie ist ez gegangen?「結果としてどうなったのか」（G.985）

istは完了の助動詞sînの現在３人称単数形、gegangenはgân（gên）の過去分詞。

文例55を見れば、gân（gên）を用いた非人称表現はergân（ergên）を用いた非人称表現と意味・用法ともにほぼ同様であることが分かる。

次にkomen（kumen）「起こる、jmにとって・・・に経過する、jmにとって・・・の事態になる、jmにとって・・・に至る」を用いた文例である。

（文例56）swennez dir kumet ûf die vrist「いつであれお前にとって次のような時間へ至るときにはいつも」（H.578）

swennezは接続詞swenne（=sô＋wanne）＋非人称主語ezの融合形「・・・するときにはいつも」。

（文例57）ez ist mir komen ûf daz zil「私にとってその目的にまで至る状態となったのです」（H.607）

komenはkomen（kumen）の過去分詞。

komen（kumen）は意味的には上述のergân（ergên）やgân（gên）と類似したものであるが、『哀れなハインリヒ』においても『グレゴーリウス』においても非人称動詞としてよりも、大半は本来の意味「来る」で使われている。

次はstân（stên, standen）「～の状態にある」を用いた文例である。

（文例58）ez stuont umbe al sîn êre「すべての彼の名誉について（＝すべての彼の名誉が）問題となっ

た」(G.461)

stuontはstân(stên, standen)の過去3人称単数形。

(文例59)sit ez alsus umbe iuch stât「あなたについては(＝あなたは)次のような状態にあるのだから」(H.918)

文例58、及び59に見られるezはともに非人称主語であると考えられる。この2つの文例にはともに対格支配の前置詞umbe「～のために」が付いているが、このumbe以下の語がこの文の意味上の主語となっている。この用法は現代ドイツ語のもあり、現代ドイツ語ではEs steht schlecht mit ihm (um ihn).「彼は調子が悪い」の形などで用いられる表現である。文例と現代ドイツ語の表現を見比べてみると、まったく違いがないことが分かる。

Ⅵ. それ以外の非人称表現

非人称動詞というよりも、非人称的熟語表現と考えられるものはそれ以外の非人称表現に分類した。

先ずは形容詞gâch(gâ)「速い、急いでいる」を用いた文例である。このgâch(gâ)はjm ist(wird) gâch「～は急いでいる」の形で非人称表現を作っている。

(文例60)und wart mir leider alsô gâch「残念ながら私はまた急いでいた」(G.3701)

「急ぐ」という表現には動詞zogenを用いたjm zogen et(属)「～は～を急ぐ」という非人称表現もあるが、中高ドイツ語期には「急ぐ」という意味においては非人称表現が用いられる傾向にあったと言えるのではなかろうか。なおこのgâch(gâ)は非人称的にのみ用いられる表現である。

次にsîn＋ze muote「jmはet(属)、もしくはdaz副文～をするつもりである」という名詞muot「意向、決意、欲望、好意」を用いた非人称表現の文例である。

(文例61)der rede ist dir ze muote nu「そなたは今その話をするつもりである」(H.956)

redeは女性名詞rede「話」の属格。

(文例62)unser tohter ist ze muote, daz si den tôt durch iuch dol「私たちの娘は彼女があなたのために死を耐えるつもりである」(H.978)

tohterは女性名詞tohter「娘」の与格、dolはdoln「～に耐える」の接続法現在。

以上が名詞muotを用いた例文であるが、ともに非人称主語ezは見られない。もちろんmuotは必ずしも非人称表現においてのみ用いられる名詞ではないが、sîn＋ze muoteの形では非人称表現になる。

ところでこれと同様の表現は現代ドイツ語にもある。Mir ist gut zu Mute.「私は気分が良い」が一例であるが、さらには副詞zumute「jmは～の気分である(～は様態を示す語句が入る)」を用いた表現もある。Mir ist sonderbar zumute.「私は妙な気分だ」。この2文例を見てみると、このような表現は中高ドイツ語期以来ほとんど変化しないまま現代にまで受け継がれていることが分かる。

次に動詞sînを用いた多彩な非人称表現である。

(文例63)iuwer sühte ist also, dâ hoeret arzenîe zuo「あなたの病気については次のようである。つまりそれ(＝あなたの病気)には薬が備わっている(＝ある)」(H.196,198)

sûhteは女性名詞suht「病気」の属格。

(文例64) und wære der arzenîe also, daz…「もし仮に薬について・・・以下の事情になるものなら」(H.216)

arzenîeは女性名詞arzeîe (erzenîe)「薬、医術」の属格。

(文例65) dem ist ouch niht ze wol「その人にとってはもちろんあまり幸福ではない」(H.600)

demは指示代名詞の男性与格で、前文のswer「誰であれ」を指す[11]。

文例63、64は物の属格とsînとが結びついた非人称表現、文例65は人の与格と様態を表わす副詞が結びついた非人称表現であり、ともに非人称主語ezは見られない。

これらの3つの文例に見られる非人称表現は物の属格を取ったり人の与格を取ったりなどの一つの枠組みを形成しており、たとえ非人称主語ezがなくとも意味が変化してしまうことはないように考えられる。

文例60から文例65までに見られる非人称表現はいずれも形の決まった非人称表現であり、一種の非人称的熟語的表現と考えられる。この点を踏まえれば、特に非人称主語ezを明示しなくとも意味は明確であり、非人称動詞のezが付かない項目に分類した動詞と同列で分類できるのではなかろうか。

次はsprechen「物・事を主語として・・・という内容である。語られている」を用いた文例である。

(文例66) ez sprichet an einer stat dâ「そこのある箇所に語られている」(H.91)

この文では通常、物事を主語として明示するため、sprechenそのものが非人称動詞というわけではない。つまり通常はezの代わりに具体的に書物などの語が主語の位置を占める。この場合ezが前文の何らかの語を受けるとも考えられる。一つ候補として考えられるのは直前行にあるdiu schrift「書物」であるが、残念ながらschriftは女性名詞であるために基本的にはsi (siu, sie, sî) で受けるべきである。こう考えるとezが具体的に指す語は存在しなくなり、このezは動作主を明示しない非人称主語ezと判断するべきである。よっての文例も非人称主語ezの見られる文となるのである。

この文例66の場合、上述の文例63、64、65など比較すると、非人称主語ezを欠くと意味や用法的な相違が生じる可能性がある。sprechenはこの非人称主語ezがあればこそ、動作主を明示せず、「～が語られる」という受動的な表現を生み出すことできるのである。この非人称主語ezを明示しなければ、sprechenは人称表現になってしまうのである。この点を踏まえれば非人称主語ezの付く項目で見てきたergân (ergên) の用法などと非常に似ていることが分かる。よってこの文例69は非人称主語ezの付く項目に分類した動詞と同列に分類することはできないであろうか。

Ⅶ. 非人称表現か否か判断のつき難い表現

『哀れなハインリヒ』や『グレゴーリウス』の中には非人称表現であるかどうかが判断し難い表現もいくつか見受けられる。以下においてその文例を挙げ、検証してみることにする。

(文例67) sô wirt im siechtuomes buoz「そうすれば彼から病が取り除かれる」(G.134)

(文例68) da enwart ir nie dar nâch sô nôt「そのとき彼女には決してそれをそのようには求めたこと

はなかった」(H.1306)

文例67はjm wirt et(属) buoz「jmからet(属)が取り除かれる」という表現を用いた文である。wirtはwerdenの現在3人称単数形、imは人称代名詞erの与格、siechtuomesは男性名詞siechtuom「病気」の属格であるので、男性名詞buozはこの文の主語と考えるのが妥当である。しかしながらbuozに関するそのほかの熟語的用法を見てみると、jm et(属) buoz tuon「・・・から・・・を奪う」やjm et(属) buoz sagen「jmにet(属)の罪なしとする、免れている」などがあるが、いずれにしてもこのbuozは文の主語と見なせるものの、この3つの用法ともにこのbuozは動詞との結びつきが非常に強いことが分かる。このように考えればこのbuozは現代ドイツ語に数多く見られる分離動詞の前綴り的な役割を果たしているとは言えるのではなかろうか。事実、現代ドイツ語の中には、名詞を分離動詞の前綴りとしているのもの数多くある。このbuozを分離動詞の前綴り的なものと見なせば、文例67には主語が存在しなくなり、この文は非人称表現の一種ではないかと考えられうるのである。

一方、文例68はどうであろうか。文例68はjm wirt nach et(与) nôt「jmはnach et(与)を求める」という表現を用いた文例である。enwartは否定辞en＋werdenの過去3人称単数形との融合形である。この表現の原型はjm wirt et(属) nöt「jmにはet(属)が必要である」と考えられるが、文例67のjm wirt et(属) buozに非常に用法が似ていることに気づく。buozの場合と同様に考えれば、nôtも分離動詞の前綴り的なものと見なすことができないであろうか。nôtが分離動詞の前綴りであるならば、この文にも主語が存在しなくなり、この文も非人称表現の一種であると考えられうるのである。

Ⅷ. 結　　論

以上『哀れなハインリヒ』及び『グレゴーリウス』における様々な非人称表現を具体的な文例を挙げることにより検証してきた。ここにおいて両作品に見られる非人称表現をまとめると次のようになる。

1．自然現象に関する非人称表現

時間と寒暖を表わす非人称表現が見られた。時間を表わす非人称表現に関してはすべてにおいて非人称主語ezが見られ、寒暖を表わす非人称表現には非人称主語ezが見られなかった。

2．非人称受動文

現代ドイツ語と同様に、文の第一位に主語以外の要素が占めるか、もしくは副文中にあるために非人称主語ezは見られなかった。

3．非人称動詞

非人称主語ezのまったく付かないもの、非人称主語ezが付く場合と付かない場合があるもの、少なくとも文例として挙げたものにはすべて非人称主語ezが付いていたものの3タイプに分かれる。

4．熟語的な非人称表現

非人称動詞を用いずに表現された非人称表現で、動詞sînによる特殊な表現であったり、ある特定の語などと結びついたりなどするものである。この場合sprechenを用いた文例69以外は非人称主

語ezはまったく見られなかった。

5．非人称動詞か否か判断し難いもの

jm wirt et(属) buoz「jmからet(属)が取り除かれる」とjm wirt nach et(与) nôt「jmはnach et(与)を求める」の二つを取り扱ったが、本稿ではbuoz及びnôtを分離前綴り的なものと見なし、非人称動詞として結論づけた。

これらの項目の中でもっとも重要なものが、第3の項目である。非人称主語ezが付かないものとしてはdunken「jnにはet(属)が・・・のように思われる（・・・には様態を表す副詞や副文が入る)」、verdriezen「jnにはet(属)が気に入らない、不愉快である」、wundern「jnはet(属)を不思議に思う、知りたがる」、über werden「imには有り余る」、gebresten「jmからet(属)またはan et(与)が欠けている」、gelingen「jmは成功する」、missegân(missegên)「jmにはうまく行かない、失敗する」である。これらの動詞に共通していることは、非人称動詞のみの用法か、もしくは人称動詞としての用法を持っていたとしても、非人称動詞の場合と大きく意味が異ならないものである。なおverdriezen、wundern、über werden、gelingen、missegän(missegën)は非人称動詞のみ、dunken、gebrestenには人称動詞としての用法も見られるが、意味的差異は余りないものである。

また第4の項目に分類したjm zogen et(属)「～は～を急ぐ」は非人称表現のみ、名詞muotを用いた非人称表現sîn＋ze muote「jmはet(属)、もしくはdaz副文～をするつもりである」においても同じく非人称表現のみであり、sîn＋物の属格もしくは人の与格の場合も同様である。

さらに第5の項目のjm wirt et(属) buoz「jmからet(属)が取り除かれる」とjm wirt nach et(与) nôt「jmはnach et(与)を求める」に関して見てみるとやはり非人称主語ezは見られないが、その形そのもので人称表現と考えられるものは見当たらない。

一方、非人称主語ezの場合によっては付く、もしくは必ず付くに分類した動詞gezemen「jnにet(属)が適切である、ふさわしいと思う」、geschehen「①（様態の副詞を伴って）jmにとって・・・の状態になる、②jmに・・・が生じる、起こる」、ergân(ergên)「jmにとって結果として～になる」、gân(gên)「～の状態である」、komen(kumen)「起こる、jmにとって・・・に経過する、jmにとって・・・の事態になる、jmにとって・・・に至る」、stân(stên, standen)「～の状態にある」は非人称動詞として使われる以外に人称動詞としての多彩な意味を持ち、人称動詞として使われている用いられる場合も多いのが特徴である。また自然現象を表わす非人称表現の項で取り扱ったtagen「(ez tagetの形で)夜が明ける」も非人称表現以外に多彩な人称動詞としての意味があり、sprechen「物・事を主語として・・・という内容である。語られている」に至ってはこの動詞そのものに非人称表現があるわけではなく、逆に非人称主語ezを付けることにより初めて非人称表現となっていた。このようなものは『ニーベルンゲンの歌の非人称表現』において行った分類と同様のものである。つまり非人称動詞の中でも非人称動詞としてしか使われない動詞、もしくは極めてそれに近い形で使われる動詞は特に非人称表現であることを明示する必要がなかった、言い換えると非人称主語ezを付ける必要性はまった

くなかったと言えるのではなかろうか。反対に多種多様な意味を持っている動詞においては非人称主語ezを付けることにより、その意味を限定できたと言えるのではなかろうか。ただ『ニーベルンゲンの歌の非人称表現』において動詞ahten「jnには～のように思われる」に見られたように、非人称主語ezが付く場合と付かない場合がある動詞が他にも存在することが本稿で確認できた。このような動詞は今後も見出しうる可能性は十分あると考えられる。

註

(1) テクストには次のものを使用。

Neumann, Friedrich: Gregorius, Mittelhochdeutsch/Neuhochdeutsch, Philipp Reclam Jun., Stuttgart, 2000.

Paul, Hermann: Der arme Heinrich, Altduetcge Textbibliothek Nr. 3, Tübingen, 1966.

(2) 実際には他説があり、この十字軍を1197-98年のハインリヒ4世の十字軍ではなく、1187-88年のバルバロッサの十字軍とも考えられており、十字軍に参加したか否かも見解の分かれるところである。また作品成立順は本稿中に示したとおり(1)『エーレク』(2)『グレゴリウス』(3)『哀れなハインリヒ』(4)『イーヴェイン』の順と考えるのが一般的であるが、実際に書き始められたのは『グレゴリウス』や『哀れなハインリヒ』よりも『イーヴェイン』の方が先で、『イーヴェイン』は一度執筆が中断されたと考えられている。

(3) Rozenfeld, Han-Friedlich/Rozenfeld, Hellmut/鎌野多美子(訳)：Deutsche Kuktur im Spät-mittelalter1250-1500「中世後期のドイツ文化、1250年から1500年まで」、S.179、Z.3-4

(4) 本稿中の現代ドイツ語の文例及び単語の意味に関してはGrosses Deutsch-Japaniches Wörterbuch (小学館、1990)から引用した。

(5) ein herreとdemの位置関係は次の通りである：Er las daz selbe mære, wie ein herre wære ze Swäben gesezzen:an dem enwas vergezzen･･･(H,29-32)。

(6) ein vischæreとdenの位置関係は次の通りである：ein vischære hete gehûset dâ, den dûhte daz niender anderswâ daz vischen wæger wære(G,2777-2779)。

(7) den gastとdemの位置関係は次の通りである:er emphie sî baz danne den gast dem des guotes gebrast･･･(G,3271-3272)。

(8) 大学書林刊『ハルトマン・フォン・アウエ、グレゴリウス』S.37の2104行の解説部分においてはim geschachをez geschiht jmの形で「人は思いつく」という意味で解釈している。

(9) manとdemの位置関係は次の通りである：wan dâ enwîvel ich niht an umbe einen sô geherzen man, swâ dem ze weinenne geschiht, daz ist･･･(G,2399-2402)。

(10) 名倉周平：岡山大学大学院文化科学研究科紀要　第17号、S.37-39。

(11) swerとdemの位置関係は次の通りである：swer joch danne die lenge mit arbeiten leben sol, dem

ist ouch niht ze wol (H,598-600)。

参考文献

Paul, Hermann: Mittelhochdeutsche Grammatik, 24. Auflage, Max Niemeyer Verlag, Tübingen, 1998.

Otto, Behaghel: Deutsche Syntax, Carl Winter's Universitätsbuchhandlung, Heidelberg, 1924.

Vikner, Sten: Verb Movement and Expletive Subjects in the Germanic Languages, Oxford University Press, New York, 1995.

Hennig, Beate: Kleines Mittelhochdeutsches Wörterbuch, Niemeyer, Tübingen, 2001.

ハンス・フリードリヒ・ローゼンフェルト／ヘルムート・ローゼンフェルト／鎌野多美子(訳)：『中世後期のドイツ文化—1250年から1500年まで—』、三修社、1999年。

戸澤明／佐藤牧夫／佐々木克夫／楠田格／副島博彦：『ハルトマン・フォン・アウエ、哀れなハイハリヒ』、大学書林、1985年。

尾崎盛景／高木実：『ハルトマン・フォン・アウエ、グレゴリウス』、大学書林、1990年。

平尾浩三／中尾悠爾／相良守峯／リンケ珠子：『ハルトマン作品集』、郁文堂、1982年。

名倉周平：『ニーベルンゲンの歌の非人称表現』：岡山大学大学院文科科学研究科紀要第17号、2004年。

『独和大辞典』、小学館、1990年。

伊東泰治／馬場勝弥／小栗友一／松浦順子／有川貫太郎：『中高ドイツ語小辞典』、同学社、1991年。

橋本文夫：『詳細ドイツ語大文法』、三修社、1986年(第36版)。